

第 25 回豊橋市小中高特連携教育推進協議会議事要録

令和 2 年 2 月 19 日 開 催

豊 橋 市 教 育 委 員 会

◆高橋会長の開会の言葉により、開会

◆令和元年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会会長 高橋豊彦（教育委員）の挨拶

○欠席者に代わる代理出席者の紹介

1 議題

(1) 令和元年度における各分科会の活動状況・成果及び次年度の活動について

①【特別支援教育分科会】 山川恭子 分科会委員長（くすのき特別支援学校長）

※「令和元年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会報告書」により報告

○中学校から高等学校等への「個別の教育支援計画」の円滑な引き継ぎについて

- ・高等学校へのアンケートにより、「個別の教育支援計画」の活用状況、情報共有のよさや課題等を把握できた。
- ・「個別の教育支援計画」の引き継ぎに関して、引き継ぐ内容や方法等を明確にすることができた。
- ・次年度は、引き継ぎ状況や活用、課題等に関する把握に努める。

○特別な支援を必要とする園児の情報について、幼保こども園から小学校への引き継ぎについて

- ・今年度から、保育課の代表にも関わってもらった。
- ・幼保こども園の支援や個別記録の状況、保育士の現状等を共通理解することができた。
- ・「個別の支援計画」の作成や引き継ぎに関する課題等が明確になり、今後の取り組みの方向性を決定できた。
- ・これまで各園で作成されていた「個別の支援計画」について、豊橋市の統一様式を作成することが決まったので、園での活用や小学校へのつながりを意識しながら記載内容等を検討し、様式案を作成した。
- ・次年度は、作成した「幼保こども園版『個別の支援計画』」の様式の改訂、有効活用の方法、内容の改善、小学校への引き継ぎの方法等について検討する。

○「個別の教育支援計画」等の保護者理解について

- ・情報の引き継ぎについて保護者の理解を得るための方策を検討するとともに、「個別の教育支援計画」の活用に関する啓発を継続する。

(山西教育長)

確認ですが、中学校から高等学校等への「個別の教育支援計画」の引き継ぎについては、すでに始まっているということですね。

(くすのき特別支援学校 山川校長)

特別支援学級と通級の生徒については、昨年度末から引き継ぎが始まりました。本年度末からは、更に通常学級の生徒についても引き継ぎが行われます。

(山西教育長)

引き継ぎについては、豊橋市でベースをつくって、東三河全域に広げていくという話だったので、今後、成果をしっかりと報告していただいて東三河全域に広げてほしいと思います。

(中島教育委員)

保護者理解が次年度の課題とありましたが、幼保こども園については、保護者との関係が密にあるので、共通理解のもと来年度以降うまくいくとよいと思います。

(豊橋特別支援学校 藤井教頭)

支援の内容は個々に応じて違うもので、それぞれに対応していく必要があります。そのため、個々への対応内容が記載してある個別の教育支援計画を事前にいただけることは、ゼロからのスタートではなく、更に支援を上乘せしていくことができるということがとても意義があることなので、引き継いだ個別の教育支援計画を今後も活用していければと特別支援学校としても思っています。

②【英語教育分科会】岩瀬佐知子 分科会委員長（二川小学校長）

※「令和元年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会報告書」により報告

○英語教育分科会の取り組みの方針・目標について

- ・英語教育については、「英会話のできる豊橋っ子」として平成 19 年度から特区、特例校の制度を活かして進めてきている。
- ・目ざす子どもの姿（ア～ウ）の実現に向けて、学びの連続性の観点で、小中高特の更なる連携に向けた取り組みを行った。
 - ア 臆することなく外国の人々ともコミュニケーションをはかろうとする
 - イ 英語運用能力を身につける
 - ウ ふるさと豊橋や日本の伝統・文化への理解と愛着を深め発信する
- ・異校種間の公開授業参観や協議会での情報交換、児童生徒・英語教員の意識調査と分析、共通理解を図るための情報発信を 3 本柱にして取り組んだ。

○高等学校意識調査について

- ・高等学校生徒に、どのような態度が育成されているか、課題は何かについて、分析・検討を行ってきた。
- ・「臆せず英語を話そうとする態度」は伸びているので、目ざす子どもの姿の一つについては実現できていると思う。
- ・「英語を読む力」「英語を書く力」は落ちていると感じている教員が多い。

○令和元年度の成果について

- ・校種（小中高特）間の理解を深めるための取り組みを進めた。
- ・小中高特教員が参加する授業研究会と協議会（情報交換会）を年間 4 回開催した。
- ・小中高教員から「英語部報」へ寄稿してもらい、小中高特における授業や取り組みの情報発信に努め、他校種の教育内容の共通理解を図った。「英語部報」は市内小中高校に送付した。
- ・小中高の児童・生徒や教員に英語教育に対する意識調査を実施し成果と課題の分析及び情報発信に取り組んだ。
- ・中学生対象の「イングリッシュキャンプ」では、昨年度に続き豊橋東高等学校の「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」と連携して、高校生の協力を得て実施をした。

○次年度への課題について

- ・英語教育内容や事情について、引き続きお互いの理解を深める。そのためにより多くの教員が他校種の授業を参観するよう働きかける。また、「英語部報」等を活用した情報発信に努める。
- ・教員間の連携を進めるとともに、児童生徒間の交流も一層進めていきたい。小中学校の夏休み行事への参加も検討していく。
- ・新学習指導要領の実施に伴う変革（小学校英語の教科化、中学校・高校の授業改善、ICT機器の活用促進）を機会に、小中高特の学びの連続性を「CAN-DO-LIST」の改訂作業を基に見直していく。

③【理科学教育分科会】高畑尚弘 分科会委員長（時習館高等学校長）

※「令和元年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会報告書」により報告

○理科学教育分科会の取り組み目標について

・教育連携

小中学校及び高等学校の公開授業等について東三河地域の小中学校及び高等学校に対して情報提供を行うとともに、専門的な知識技能をもった高等学校の教師が小中学校の授業の教材開発に協力するなどの幅広い教育連携を図っていく。

・指導の系統化

小中学校及び高等学校の公開授業等を参観したり、情報交換したりすることで、異校種の学習内容や指導方法を知り、指導の系統化を図っていく。

・教師の資質向上

理科を専門としない小学校の教師が魅力的な理科授業が実施できるように、高等学校の専門的知識や実験器具の使い方を学ぶ機会、校種を越えた多様な教師との意見交換ができる機会を設ける。

○令和元年度の成果と来年度の取り組みについて

・高等学校教師による小学校教師への理科実験講習会

昨年度に引き続き時習館高等学校、豊丘高等学校及び豊橋工業高等学校の教員に講師をお願いし、時習館高等学校において4講座（化学・物理・生物・地学）を各30分ずつ実施することができた。小学校教師の参加者数は36人で、市外からも7人の参加者があった。

来年度については、対象は小学校の理科を専門としない教師であるが、中学校の理科の教師も参加可能とする。時間については、各分野30分だったが、短かったという意見もあったため、今後検討をしていく。

・高等学校授業公開

豊橋西高等学校で、6人の教師が授業（化学・物理・生物・地学）を公開し、小中学校の教師にとって普段は見る機会のない高等学校の授業を参観することができた。

来年度の高等学校授業公開は、時習館高等学校 SSH 事業、SS 探究Ⅱ 課題研究発表会の予定。

・小学校理科研究部授業研究会及び研究協議会

高等学校からは、6人の出席者があり、情報共有を図るとともに、異なる角度からの意見交換を実施できたことなど、小中高の教師同士のつながりを深めることができた。

④【言語能力分科会】山内潤次 分科会委員長（豊岡中学校長）

※「令和元年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会報告書」「言語能力に関する実態調査中間報告書」により報告

○言語能力分科会の取り組み目標について

- ・目ざす子ども像

「情報を正しく理解し、自分の思いや考えをわかりやすく表現できる子」

- ・教育連携及び指導の系統化

発達段階に応じた言語活動を重視した授業の在り方を探ったり、情報共有したりして、子どもたちの言語能力の向上を図る。また、小中学校及び高等学校の公開授業等を参観したり、情報交換したりすることで、異校種の学習内容や指導方法を知り、指導の系統化を図っていく。

- ・子どもたちの言語能力の現状把握と方策

子どもたちの言語能力に対する意識調査及び小中高等学校の授業の現状をアンケート等によって調査・分析し、子どもたちの言語能力向上のための方策を考える。

- ・教師の資質向上

言語活動を重視した授業の在り方を学ぶとともに、学んだことを広めていく。

○令和元年度の成果について

- ・小学校国語授業研究会では、栄小学校において小学 3 年生の国語の授業を参観し、文中の言葉を根拠として自分の考えを構築するための支援、辞書を活用した一人読みや話し合い活動について協議を行った。小学校教諭中心の協議会に、分科会委員の中学校教諭や高等学校教諭なども参加し、積極的に発言ができた。
- ・高等学校授業参観・情報交換では、豊橋南高等学校において教育コースの授業を参観し、言語能力を生かした協働学習、小中学校における言語能力の育成について情報交換を行った。東三河の小中高の教諭も参加できるようにして、市外から 6 名の参加者があった。異校種の授業の進め方や考え方の違いなどに気づく機会とすることができた。
- ・教師の資質向上としては、今年度は、分科会委員のみではあるが、中央図書館の岩瀬専門員の紹介する本や新聞記事をもとに学習会を行った。
- ・図書館の年齢別延利用者数においては、10 代 20 代の利用が少なく、また、小学生の「読書通帳」100 冊達成者も小学生全体の 2.6%のみという現状も浮き彫りになった。

○「言語能力に関する実態調査 中間報告書」について

- ・「言語能力に関する実態調査」を実施した。アンケート内容については、平成 23 年度に愛知県教育委員会が実施したアンケート（教職員調査のみ）をベースに、分科会委員で検討を行い、児童生徒用・教職員用を作成した。
- ・アンケートは、豊橋市内の公立小学校 52 校、公立中学校 22 校、公立高等学校 8 校を対象に実施し、児童生徒については、小学 4 年生以上の抽出児童生徒に対して実施した。
- ・児童生徒アンケートより、「話す」「書く」ことに課題があるようである。
- ・今年度は、集計・分析のみを行い、結果を来年度以降にまとめていく。

○来年度の取り組みについて

- ・来年度の授業公開について、より多くの異校種の先生方に参観してもらうための工夫をする。
- ・「言語能力に関する実態調査」について、より深く分析をして、課題と方策をまとめ、発信していく。
- ・教職員支援機構が主催する「言語活動指導者講習会」に分科会の代表者が参加し、伝達講習会を開催する。

(時習館高校 高畑校長)

高等学校の教師が、「話す」「聞く」「書く」「読む」の4観点の中から大事なものを選ぶと、高校生ですから、アウトプットのスキルである「話す」「書く」を身につけさせたいと考えます。

(内浦教育委員)

言語能力分科会の発足当初、「調査は本当にできるのか」「結果は分析できるのか」と先生方がすごく悩まれていましたが、この調査結果はすばらしい財産であると思います。今後、調査結果をまとめて各学校に配付するとありますが、とても大事なことだと思います。もしも可能ならば、有識者や専門家の方も交えて分析をしていくとよいと思います。それぐらい価値のある調査結果であると思います。今後、調査結果を分析・精査して、課題を3~4つに絞って、その課題解決に向けて施策を考えていけるとよいと思います。一方で、子ども達の学校以外での、日常のコミュニケーションツールが、ライン・インスタグラム・フェイスブックなど、写真や絵を多用し、言語をあまり使わないものが中心なので、アンケートにはない内容についても専門家の方の意見が聞けると更によいと思います。

(豊岡中学校 山内校長)

国語の授業においても、子ども達は語彙力が乏しいので、イメージ化させるのにどのような手立てをしていくのか、これからますます難しくなると思います。

(新川小学校 杉浦校長)

読書について、小学生の子ども達は読書が大好きで、放課になると図書室で本を借りるのに長蛇の列ができるほどです。しかし、中学・高校になると本を読まなくなっています。活字離れと言われますが、スマホなどで豊富な情報は取り込んでいます。本を読んでいない、文章として読んでいないため、ワードとして捉えているのみという報告があります。今回のアンケートを見ると、指導者としてどんなところに力を入れて指導しているかということで、実際の指導の現状かと思いますが、本を読まない個々の子ども達にとって意味のある指導になっているのかと疑問に感じてしまいます。

(高橋会長)

読書量と知識について、社会環境が変わってくる中で、何をもって評価していくのか難しいと思います。また、コミュニケーション能力という言葉が過剰に使われており、聞く力と話す力のバランスの捉え方が気になっています。ビジネスの社会では、相手の要望に応えるのが基本なので、相手の話をよく聞かずに話をするのはただの主張であって、おもしろくな

い話になってしまいます。つまり、話し上手は聞き上手ということです。コミュニケーション能力の捉えとして、今の子ども達は主張できないといけないと思っているのではないかと思います。

(山西教育長)

とても素晴らしいアンケート調査をやっていただきありがとうございました。愛知県教育委員会が作成している「教員研修の手引き」において、全教科のコラム欄に言語活動についての記載がされたのが平成23年だったと思います。これを参考にして、小中高等学校それぞれにおいて、どのように言語能力を育てていくのかを考えるのが次のステップかと思います。そうした時に、言語能力分科会の目ざす子ども像が、「情報を正しく理解し、自分の思いや考えをわかりやすく表現できる子」とありますが、小中高等学校すべてこの目標でよいのかと疑問に感じます。アンケート調査をみると、それぞれの育ちがあります。また、小中高特連携教育の意義は、一人の子どもを12年間でどう育てていくかをみんなで意見を出して考えていくことかと思います。そのため、それぞれの校種の違いにおいて、まず目標をしっかりと定めて、それに行きつくような授業が行われているかを相互交流で授業を見ていくこと、それに尽きるのではないかと思います。小学校の先生は、小学校から送り出した子ども達が、高校3年生でどのように育っているかをしっかりと見る。高等学校の先生は、小学校でどのような教育を受けてきたのかということを見る必要があります。英語教育分科会のアンケート結果では、中学校の教師が、小学校や高等学校の授業を参観したという割合が非常に低いという結果が出ています。時間をしっかりと確保して、他校種の授業を見られるようにすることが大事だと思います。言語能力についても、小中高等学校でそれぞれ国語の授業における言語活動が違うと思うのでお互い授業を参観し合うことが大切かと思います。

◆全体を通しての意見交流

(豊橋東高校 高橋教諭)

6月19日に豊橋東高校、11月13日に豊橋商業高校で英語の公開授業が行われました。他校種からの参加者も多数あり、協議会においても活発な意見交換が行われ、異校種間の交流を深めることができました。また、中学生を対象としたイングリッシュキャンプにおいては、昨年度に引き続き、豊橋東高校の生徒に協力を依頼して、中高生徒間の交流を進めました。参加した生徒の英語学習意欲の向上につながるとともに、高校生にとっても中学生と一緒に学ぶ貴重な体験となりました。

(豊橋高校 丸崎校長)

英語教育分科会の高等学校アンケート結果で、「ここ数年入学してくる生徒で、英語に関する力で伸びていること」について、「臆せず英語を話そうとする態度」が81%ということで、この力は、まさに先生方が伸ばそうとしていた力になります。この力の成長を高等学校の先生方が実感できているということは、中学校の先生方の授業力の高さの結果であり、教師がねらったことがそのまま成果に出ていることに驚きを感じました。また、「英語を読む力」「英語を書く力」について、高等学校の先生方が落ちていると感じているわけですが、以前の生徒と比較した結果であり、社会で求められている英語力が以前と変わってきているので、今後、小中高等学校でどのような力を伸ばしていくのかをバランスを見ながら考えていく必要

があると思います。

(石巻中学校 萩山校長)

特別支援教育について、個別の教育支援計画の保護者理解は、学校現場でも非常に難しい面があります。支援が必要な子どもの保護者については、非常に熱心な方もいれば、昔の特殊学級の捉えをしている方もいます。そのため、個別支援の必要性について話をしても理解してもらえない保護者の方もおられます。中学校では進路選択もあるため、子どもに必要な支援を協力して行っていく必要がありますが、保護者の理解が得られないことも多くあります。何かよい方策を考えていければと思います。

(豊橋特別支援学校 藤井教頭)

一番困っているのは子どもであって、どのような支援が有効なのかという成功例を積み重ねていく必要があります。その成功例を積み重ねることで、子どもの変容から保護者の方に理解をしていただくことで、個別の教育支援計画の必要性を感じ取ってもらうことが重要だと思います。失敗例よりも支援を行ったことによる成功例から理解を深めてもらうことが大切だと思います。

(駒木教育監)

高等学校の教師が、小中学校での学びを知る機会はほとんどありません。小学校では、本当に丁寧な指導をしてくれているので、このことをもっと高等学校の教師が知る必要があります。言語能力分科会のアンケート結果にもありますが、「話し方ルール」「聞き方ルール」については、小学校では非常に大切にしていますが、高等学校ではほとんど行っていません。高等学校の教師は、小学校でどのような指導がされ、子ども達がどのようなことができるのかを知らないため、講義的で一方的な授業が多く、生徒が発言する授業が少ないのが現状です。小中学校、高等学校の授業を知ることができるのが、この小中高特連携教育推進協議会の良さの一つで、昨年度から、小中学校の公開授業を高等学校の教師にも公開するようになりましたので、今後も継続してほしいと思います。

(南部中学校 宮崎校長)

昨年度、この協議会で言語能力分科会が発足することが決まったわけですが、その時に豊橋東高等学校の藤原校長が「発足の意義も認めるし、賛成するが、教員の働き方改革が言われる中で、無限に時間があるわけではないので、長期の目標と1年間の短期の目標をしっかりと定めて活動することが大事である」と言われたのを思い出します。私からも、同様をお願いしたいと思います。言語能力分科会は、アンケートを実施して素晴らしい成果があったので、来年度は焦点を絞って議論をしていくことが重要であると思います。理科学教育分科会では、小学校教員理科実験講習会の参加者の大半が、理科が専門でない先生であることが素晴らしい成果であると思います。また、高等学校の先生が小中学校の先生方に授業を公開する雰囲気はここ数年でしっかりとできたように感じます。先程、山西教育長が言っておられた「お互いの授業を参観し合う」ということは一番の根本だと思うので、こうした雰囲気を今後も育てていただきたいと思います。英語教育分科会では、アンケートをとっていただいています。おそらく経年資料があると思います。激しく変わっていく時代だからこそ、経

年変化を確認していくとよいかと思います。更に「CAN-DO リスト」が課題となっていますが、「CAN-DO リスト」はすべての高等学校で作成されているものの、高等学校では使っていない教師が多くいると聞きます。「CAN-DO リスト」がなぜ使われないのか、使うとどんなメリットがあるのかについて、もう一度提案していくこともよいかと思います。本協議会についてですが、様々なことを決めていくことが重要なのはもちろんですが、各分科会には小中高等学校の教師が委員となっており、委員同士の交流がとても大事だと思います。かつて、本協議会には、「教員の相互交流分科会」がありました。教員交流こそが、小中高特連携の基盤であるということをつくられたかと思います。教員同士が交流をして、知り合いになることで、わからないことを知り合いの高等学校の先生に聞いてみようと思えるような人間関係をつくるのが、この小中高特連携の推進が、今後もますます発展していく基盤だと思いますので、各分科会の委員長先生は、教師の交流や人間関係づくりまでやっていただけると、連携教育が推進できるかと思います。

2 その他

(1) 東三河小中高特連携教育の推進について

東三河教育事務所 木田剛 指導課長、吉田明弘 主査

○「キャリア フレッシュ セミナー」について

- ・東三河 8 市町村の中学 1 年生に、東三河の高校の学科紹介と高校生との語り合いを通して、将来の夢や進路を考える機会にしてもらうため、8 月 24 日（土）に愛知大学・豊橋キャンパスで開催。
- ・当日は、中学 1 年生約 400 名が集まり、三河の普通科・専門学科の高校 12 校 10 学科の高校生から学科や学校生活の話の聞いたり、疑問や悩みを高校生と語り合ったりした。

○「人事交流連絡会」について

- ・「学校種間の壁を越えた連携」のため、実際に交流をしている教員を招き、交流の実際や勉強になっていることなどを各校種の管理職等に向けて語っていただく場を設定。
- ・交流者が、元の校種に戻った時に生かせる財産について、生き生きと語り、班別での質疑応答・意見交流の場では、報告をもとに、同じ東三河の仲間としての交流を促進できた。

○「専門学科を有する高校における初任者研修」について

- ・豊川、蒲郡、田原、新城、北設楽の初任者を対象に、教員としての視野を広げ、キャリア教育の指導力を高めるため、渥美農業高等学校と田口高等学校で実施した。
- ・教員の大半は普通科高校出身のため、興味関心が高く、積極的に参加できていた。

○「東三河輝く人・活躍する人紹介プロジェクト」について

- ・魅力ある講師の方を紹介できた。

◆オブザーバーからの感想

(東三河教育事務所 木田指導課長)

言語能力分科会を新たに立ち上げられていましたが、新学習指導要領が完全実施されるにあたって、子ども達が思考力や判断力を身につけるための基盤となる言語能力をどう捉えて育成していくかということで、大変重要な取り組みになるかと思います。今後、系統性のあ

る指導や具体的な手立て等を道筋として示すことができれば、ぜひ管内関係市にも広げていただけたらと思います。

(蒲郡市教育委員会 山本課長補佐)

言語能力分科会のアンケート結果が参考になります。蒲郡市の小学生は、国語に課題をもっていますので、豊橋市の取り組みを参考にしていきたいと思います。

(豊川市教育委員会 原指導主事)

個別の教育支援計画の作成については、一昨年法的に義務付けられたということで通知をいただきましたので、校長会等で周知したり、各小中学校を訪問して確認したりしました。作成については、保護者の同意を得て作成して引き継ぐという条件と法的な作成義務ができたため、混乱があった市もあると聞いています。受け取る高等学校も、引き継ぎの状況が不明確では困るとか、引き継ぐ資料が多くなってすべての資料を熟読して活用するとなると難しいかと思います。障害のある子ども達には、自分で合理的配慮を求めていく力を今後身につけさせていくことが大事になってくるかと思っています。

(新城市教育委員会 亀甲指導主事)

一人の子どもの成長を市全体で見守っているということや、言語能力分科会においては、系統性と必要性を捉えて設定されていることなど、勉強になりました。子どもを育てるためには、まず教員を育てなくてはいけないということで、小中高等学校の教員が交流等を行って相互理解を深めるなど、校種の壁を低くしていくことの重要性も感じることができました。

◆教育政策課長から、次回の開催時期の連絡

- 次回開催日 令和2年5月下旬
- 開催場所 未定

◆高畑副会長の閉会の言葉により、閉会